



マザーレイクフォーラム体制図

case 4

琵琶湖流域(滋賀県)

マザーレイクフォーラムがつなげる琵琶湖の仲間

びわ活で地域を活性化

わが国の湖の中で最大の面積と貯水量を誇る琵琶湖では、戦後の高度経済成長期以降、水質悪化などの環境問題、さらには、外来魚による生態系への影響といった問題にも直面しました。このような問題に取り組む、琵琶湖の素晴らしい自然環境を次世代に引き継ぐため、滋賀県では「琵琶湖総合保全整備計画(マザーレイク21計画)」を2000年に策定し、計画に基づいた流域保全のための幅広い活動を、住民、企業、研究機関等と連携して実施しています。

活動の中心である市民参加の「マザーレイクフォーラム」は様々な活動の連携基盤となっており、自然環境の保全活動のみならず、各種レクリエーション事業の推進にも寄与し、住民の幅広い参加を促し、地域の活性化にも貢献しています。

フォーラム活動には、事業者からの寄付を早期から受け入れ、琵琶湖の保全活動の財政基盤として効果的に利用してきました。



これまでの取組

1972

「琵琶湖総合開発事業」
(1972～1997) (国)1970～90年代、琵琶湖の水質悪化などの
湖沼環境への影響が表面化

1996.4

「琵琶湖の総合的保全のための課題
と今後の取り組み(中間取りまとめ
作成)」

1997～1998

「琵琶湖の総合的な保全のための計画調査
(国)」

2000.3

「マザーレイク21計画(第1期計画
(1999～2010)策定」

2011.10

「第2期計画(2011～2020)」開始

2012.3

「マザーレイクフォーラム」設立
「びわこ」会議開始

2014.3

「滋賀県流域治水の推進に関する
条例」制定

琵琶湖の総合保全を目指す

日本最大の湖である琵琶湖は、本州のほぼ中央に位置し、万葉集では「淡海(あふみのうみ)」と呼ばれ、古来より農業、漁業の中心、そして重要交通路として地域の要でした。現在でも淀川水系を介して、下流域の大阪を始めとした都市部の重要な水資源となっています。

琵琶湖では、高度経済成長期の近畿圏の水需要増大に因るため1972年より「琵琶湖総合開発事業」が実施され、地域の社会基盤が格段に整備されました。しかしこの地域の経済発展は琵琶湖の水質環境を悪化させ、さらに、ブラックバス等の外来魚によって琵琶湖の生態系も大きく変わろうとしていました。

このような背景の下で、水資源・自然環境保全等の包括的観点から琵琶湖総合保全整備計画(マザーレイク21計画)が2000年3月に策定されました。琵琶湖では現在、この計画に基づき、市民参加の「マザーレイクフォーラム」が軸となった様々な活動が行われ、地域活性化にも貢献しています。

さらに台風災害を契機に2014年に策定・施行された「流域治水推進条例」は、治水の面から琵琶湖の

流域保全を支えています。

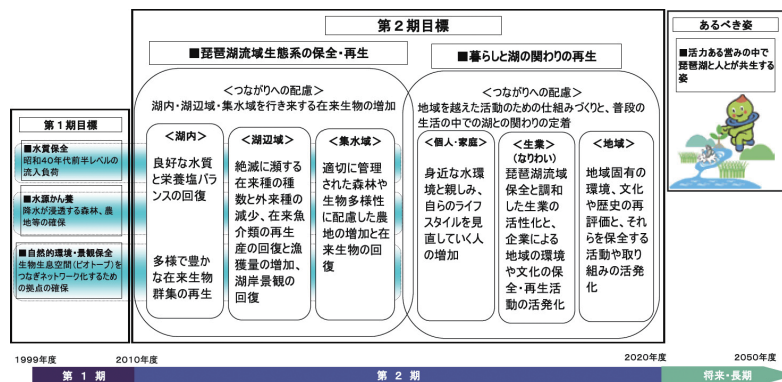
マザーレイク21計画

琵琶湖の総合保全を目指し、21世紀における湖沼総合保全のモデルにすべく策定されたこの計画では、琵琶湖の現状と課題を「水質保全」、「水源かん養」及び「自然的環境・景観保全」の3つの視点から明確にし、さらにはそれらに直接的な影響を与える河川流域の「土地利用のあり方」まで踏み込みました。そして、市民・事業者の具体的な取組内容とともに、2050年度までの短中長期の段階的計画目標・あるべき姿を定めています。

計画は第1期の見直しを経て2011年度から第2期として再スタートしました。第2期では、①琵琶湖流域生態系の保全・再生、②暮らしと湖の関わり再生の二つの施策の柱を設定し、三つの場(湖内、湖辺域、集水域)と三つのつながり(個人・家庭、生業、地域)について、その達成状況を定量的に把握するため、環境や社会の状態を表す指標を設定し、施策と進捗状況とを合わせて目標達成度を評価する進捗管理を行っています。

この目標管理と計画の実効性を確保するための受け皿として、「マザー

レイクフォーラム」が2012年に新たに設立されました。



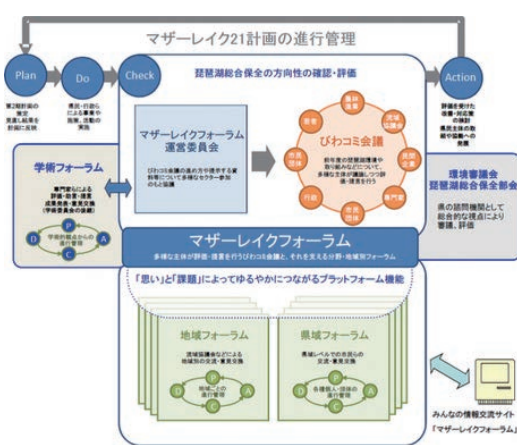
マザーレイク21計画第2期改定版の計画目標

流域マネジメント、ここが「鍵」

「鍵」その1 多様なセクター参加の ためのフォーラムの存在

マザーレイク21計画の理念の下で設立されたマザーレイクフォーラムは、琵琶湖への「思い」や「課題」に「ゆるやかにつながる場」です。設立以来、様々な人や団体が「つながり」を築いていくためのプラットフォームづくりを続けてきました。このフォーラムでは、産官学及び市民団体の代表者からなる運営委員会が組織され、計画達成のための具体的な活動内容に関する意思決定とその運営、進捗管理、評価、提言を行っています。また、フォーラムの主な活動として次の3つがあります。

「びわコミ会議」 県民の互いの思い



マザーレイクフォーラムによる計画の進行管理



マザーレイクフォーラムの主な役割

「鍵」その2 多様なセクターが一堂に 集う「びわコミ会議」

や取組状況を共有し、琵琶湖の現状や将来について話し合う行事を運営。「地域・分野別フォーラム」地域別・分野別に存在するさまざまなネットワーク組織の活動を「マザーレイクフォーラム連携事業」として承認し、他の事業との効果的な連携・交流促進を図るとともに、PR活動等を支援。「プラットフォーム」インターネットを通じて多様な主体が分野を超えたつながりを育み、新たな活動を展開することを支援し普及啓発を実施。

マザーレイクフォーラムが運営、毎年開催する「びわコミ会議」は、流

域の保全に関わる関係者が一堂に集まって、お互いの立場や経験、意見の違いを尊重しつつ、思いや課題を共有し、琵琶湖の将来について話し合い、さらにはマザーレイク21計画の進捗管理も行うといった、計画上の重要な一大イベントです。

2012年より毎年8月下旬に開催され、9回目となる2019年のテーマは、「びわ湖のこれまで、そしてこれから」、92団体、約200名の参加がありました。

びわコミ会議に先立ち、滋賀県が中心となって、各指標の推移をまとめたレポート「びわ湖なう」が取りまとめられます。そしてこのレポートに基づいて、学識経験者による取組の評価の場として「学術フォーラ

ム」が開催されます。びわコミ会議では、これらの事前の活動成果を効果的に取込み、多様なセクターが効果的に、琵琶湖の現在、そして将来について話し合う場を提供しています。会議の具体的なプログラムは次の通りです。

【第1部】これまでのコミットメントを確認、レポートや各団体報告により当該年度の評価を共通認識。

【第2部】グループ討論を通じて課題・今後の取組を確認、その結果をまとめ、参加者でコミット。

「鍵」その3 企業との連携した保全活動 「お茶で琵琶湖を美しく」

滋賀県では琵琶湖の総合保全のた



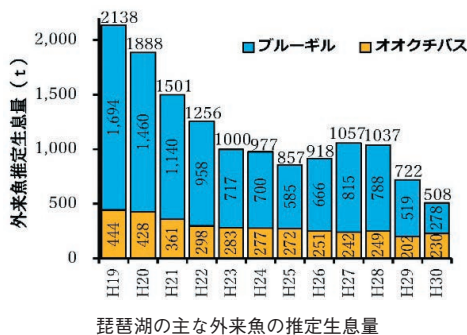
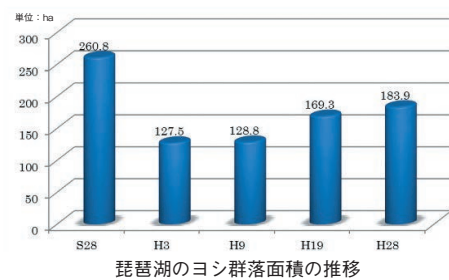
びわコミ会議の様子



「お茶で琵琶湖を美しく」キャンペーンホームページ



「この夏！びわ活！ガイドブック2019」表紙



めに、企業との多角的な取組を行っています。その1つが株式会社伊藤園と2008年より取り組んでいる「お茶で琵琶湖を美しく。」キャンペーンです。この取組は、企業の製品のパッケージに「マザーレイク」のロゴマークを表示、琵琶湖の環境保全の必要性を訴求するとともに、企業から製品売上の一部が滋賀県の推進する琵琶湖環境保全活動に寄付されるものです。

県では、このキャンペーンの寄付金を活用して、保全指標のヨシ群落育成事業（ヨシ帯の維持管理、ボランティア活動への助成）やヨシの保全に関する啓発事業（博物館でのヨシ展示のリニューアル）を実施しています。

このガイドブック、より多くの方が琵琶湖と関わり、環境保全活動への関心をより高めるため、フォーラムとも連携しています。

ガイドブックでは、夏に琵琶湖及びその流域で開催される、環境保全活動、体験型セミナー、お祭りや釣りなどのスポーツ・レクリエーションなどのガイドブックを発行しています。

マザーレイク21計画では、琵琶湖の総合的保全の達成に向け、水質の他、在来魚介類の漁獲量、ヨシ群落といった生物の生息域などの指標値による数値目標が定められています。

ヨシ群落の面積や外来魚に関する取組は、指標値から見た場合、着実に進んでいます。また、富栄養化を

滋賀県では、条例で定めた7月1日の「びわ湖の日」を中心に、市民が保全活動に関心を持ち、理解を深めてもらうための新しい取組として、2018年より「この夏！びわ活！ガイドブック」を発行しています。

活動の効
健全な生態系の
バランスに向けた
より総合的なアプローチ
を目標として

ンといった各種イベント情報の他、保全活動への寄付金付き商品、地元農水産物を使った料理のレシピなどが網羅的に紹介されています。

示す赤潮の発生も近年ほとんどありません。その一方で、在来魚介類の漁獲量の減少やヨシ群落の植生構成などは悪化傾向にあるなど、項目により状況や傾向が異なっています。

この原因は、はっきりとわかっていませんが、琵琶湖は「生態系のバランスが崩れてきた」状態にあるといえます。その解決のためには、水、物質、生き物、そしてそれを取り巻く社会のつながりを踏まえた、より総合的な視野に基づくアプローチが求められています。